

Title	「文章表現」「日本語表現」の日本語教育への応用
Author(s)	古川, 由理子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 14 P.89-P.103
Issue Date	2016-03-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/56949
DOI	10.18910/56949
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「文章表現」「日本語表現」の日本語教育への応用

Application of “Writing Style” and “Japanese Expressions” to teaching Japanese as a Second Language

古川由理子

【要旨】

日本人大学生を対象にした「文章表現」「日本語表現」といった講座の開講が各大学で盛んである。そこで用いられている手法は、日本語教育からの知見も数多い。筆者も、日本人学生を対象に、「文章表現」や「日本語表現」の講義を担当してきた。その経験を通して得た知見を、再度、日本語教育に還元するのも有意義なことではないだろうか。本稿では、まず、筆者が行なっている「文章表現」「日本語表現」の講義について紹介し、日本人学生がどのような点を重視し、習得を目指しているかを示す。そして、その中から、外国人留学生にも求められるであろう項目について、どのようなアプローチができるかを検討し、その際の課題についても言及する。

1 はじめに

昨今、多くの大学の学部において、「文章表現」あるいは「日本語表現」という科目が開講されている。これは、本来、大学進学以前に身につけておくべき文章力や表現力の欠如により、レポート等の課題が十分にこなせないという現在の日本の大学生の状況に鑑みた大学側の措置であると言える。筆者も、当該講義に実際携わっている一員であるが、開講科目としての歴史が浅いゆえ、そこで用いられているのは、日本語教育からの知見も少なくない。ならば、逆に、日本人学生向けのカリキュラムを、留学生向けにアレンジし直し、留学生の授業においても文章力や表現力の向上を目指すこともできるのではないだろうか。本稿では、その可能性について、具体的に述べたい。

ただし、いくら大学側あるいは教員側がよかれと思って導入した受講科目でも、学習者のニーズとの乖離が大きければ、そこには無視できない問題（ギャップ）が生じる（Nunan1995）。それに対し、岡崎（1996）は、学習者の言語学習観に、外からのアプローチ（例えば教師）によって変容をもたらす可能性を示唆している。そこで、本稿では、まず、日本人学生の要望を、授業に対するリクエストという形でニーズとして把握し、できるだけそれに沿ったシラバスを構成するということで、授業を提供する側（教員）と受講する側（学生）のギャップを少なくしようと試みた。次章以降、その概要について述べる。

2 「文章表現」「日本語表現」の授業の概要

筆者が担当している授業（大阪府内の私立大学）は、対象学部によって「文章表現」「日本語表現」と名称が変わるが、期待されていることはそれほど変わらないようである。特に大学から指示されるわけではないが、「日本語表現」の対象が薬学部であり、ほぼ全員が薬剤師の資格取得を目指しているため、筆者は、「日本語表現」の授業では、口頭表現もできるだけ取り入れ、実習形式の授業も数回行なうことにしている（授業内容については、次章で詳述する）。

どちらも、半期完結の授業で、取得単位は2単位である。対象学年は主に1年生、場合によっ

ては2年生以降4年生まで受講可能であるようだが、多数を1年生が占める。授業の性格上、筆者が長年担当している大学では、25名という定員があり、抽選で受講者が決定される。筆者担当の授業のみならず、複数の教員により同じ授業が開講されているが、担当者同士の打ち合わせなどは特になく、担当教員に一任されている状況である。なお、筆者が一時、担当した、他大学での「日本語表現」では、新設された学部による初めての開講科目であったということもあり、1クラスに200名、100名、という学生が登録しており、実質的に期待されるような授業運営は不可能であった。そのため、大学側と交渉し、学期途中から教員を増やしてもらい、2クラスに分けていただいた。しかし、それでも、100名、50名という大所帯であったため、25名相手の授業と同様なことはできずじまいであった。やはり、効果的なクラス運営に、人数制限は必要不可欠であると言えよう。

半期15回の授業であるため、目的をどこに設定するかで授業内容は大きく変わるが、専任教員の「レポートを課しても、レポートの体裁になっていない。しかし、授業でレポートの書き方までを指導することは困難」という声を重視し、「文章表現」「日本語表現」共に、「話し言葉と書き言葉の違いに留意し、レポートを形式に則って書けるようにする」ということを最終的な目標にしている。

2 授業の流れ

2.1 ニーズ調査（学生アンケート）

1回目の授業では、オリエンテーション（授業の進め方、評価の仕方などの説明）とあわせ、学生に自由記述の形でアンケートを取り、「この授業に期待すること、扱ってほしいこと」を書くよう指示している。シラバスは、その性格上、当然、こちらで授業前に提示しているが、人数制限を行なっている授業であるため、シラバスに優先してリクエストを扱うことも明示している。7回行なったアンケートで、学生から要望のあるだいたいの項目は以下の通りである。性質上、AからCの3つに分けて示す。

A：《主に文章の書き方に関わるもの》

履歴書の正式な書き方

年上の人に送るメールの書き方

残暑見舞いなど、かたい文章の書き方

自己紹介（自己アピール）の仕方・エントリーシートの書き方

話し言葉と書き言葉の違い

文章のつなげ方

引用の仕方

レポートの書き方

文章を読んで考えたことを文章に書く方法

天声人語の要約

起承転結に基づいて書く

（教育実習の教案の書き方） *これは、授業では扱えていない

B：《主に話し方に関わるもの》

敬語の正しい使い方・誤った敬語

年上の人との話し方

話題の広げ方

話し上手になるための方策（身近なトピックから発表まで）

わかりやすく、簡潔に伝える方法

C：《主に一般常識に関わるもの》

四字熟語・ことわざ

大人として知っておいた方がいい表現（冠婚葬祭・はがき）

美しい文章とは

読みやすい文とは

まず、毎回、学生からリクエストとして上がるものに、Aの「話し言葉と書き言葉の違い」についてがある。これは、BやCの範疇にも入るものであり、大学入学以前に身につけておくべき項目であると言えなくもないが、理想と現実とは異なるのが現状のようである。この項目については、授業で繰り返し扱うことになる。また、「レポートの書き方」というのは、大学生で、喫緊の課題であるということもあり、毎回リクエストに頻出する。ただ、テーマを設定し、資料検索を行ない、データを整理して結論を述べる、という本格的なレポートの手順を辿る時間はとても確保できないため、簡略化した模擬レポートの作成を期間の最後に扱うのがやっとなのである。意外に思う点は、「履歴書の書き方」「残暑見舞いの書き方」など、市販のマニュアル本で事足りるようなテーマも授業にリクエストする点だ。多くの学生がこれまでにアルバイトの経験もあり、実際に履歴書も書いてきてはいるのだが、将来の就職活動を見据えて、正式な書き方を確認したいようである。これは、日本で就職を目指す留学生にとっても、切実な課題であると言えるだろう。

Bに関しては、「敬語」へのリクエストが毎回、多く出される。自身の敬語の使い方への自信のなさと共に、これも、将来の就職を見据えてのことのようである。「敬語の誤り」「間違った日本語」についてのリクエストも、自身がそのような失敗をしていないかが不安であるためのようだ。Bの項目については、薬剤師を目指す学生がほとんどである薬学部対象「日本語表現」でリクエストに上がることが多い。特に、「自分はコミュニケーションが下手だ・苦手だ」と感じている学生にとっては、「話題の広げ方」「話の続け方」「話し上手になりたい」など、話すことへのプレッシャーが相当である。

さらに、Cについても、就職の際、筆記試験で問われるもの、エントリーシートなどで失敗しないための最低限の知識を、1年生のうちから身につけておきたいという要望が見て取れる。就職、という、いずれ来る課題に向けて学生たちが切実であることがうかがえる。

2.2 ニーズのシラバスへの反映

このように、学生からのリクエストを聞き、共通項を上のように整理した上で、以下のようなシラバスを学期はじめに用意している。実際の授業第1回目で、その都度アンケートでリク

エストを確認し、微調整をして、その学期オリジナルのシラバスが完成する、という手順である。なお、リクエストにはないが、レポートを書く際、必要となる、以下の2つも学習目標とし、それに対応する項目を授業で扱うことにしている。

1. 適切な語彙や文体を用いて公的な文章が書けるようになる
2. 自分の意見を相手に説得力をもって述べることができる

15回の授業の概要を以下に示す。なお、右に、3.1で紹介したリクエストのどの部分にあたるかを書き添える。

1. <u>オリエンテーション・自己紹介</u>	リクエストの記入
2. 自己アピールをする (1)	効果的な自己アピール
3. 自己アピールをする—エントリーシートを書く (2)	エントリーシートの書き方
4. 履歴書を書く	履歴書の正式な書き方
5. 話し言葉と書き言葉を区別する	話し言葉と書き言葉 (随時)
6. 敬語	敬語の基礎・敬語の誤り (随時)
7. 手紙文を書く	正式な手紙の書き方
8. メールを書く	目上/知らない人へのメール
9. よく使われる四字熟語について学ぶ・起承転結	ことわざ・往復はがき等も含む
10. 感想文を書く—事実と意見を分ける	読んで考えたことを書く
11. 意見文を書く—3段落の意見文	レポートの書き方の一環
12. 引用の仕方、グラフの読み取り	正しい引用形式
13. レポートを書く (1)	レポートの形式・体裁
14. レポートを書く (2)	序論・本論の書き方
15. レポートを書く (3)	結論の書き方・参考文献

なお、5回目で導入する「話し言葉と書き言葉」および6回目の「敬語」に関しては、学生の誤りも多く、授業の効果調査であるアンケート (後述) の記述からも、何度も繰り返し確認することの重要性について複数の学生が毎回言及するため、適宜、それ以降の授業で問題を取り入れたり、短い会話練習をペアでしてもらったりしている。薬学部対象の場合、「レポートの書き方」の1回分を、実際の患者—薬剤師に見立てたロールプレイをペア学習で行ない、「年上の人との話し方 (敬語を使用)」「話題の広げ方」に充てている。

3 実際の授業

紙幅の関係上、15回すべての授業をここで紹介することはできないが、留学生にも応用できると考えられる内容をピックアップして具体的に紹介する。

3.1 話し言葉と書き言葉

日本人大学生であっても、話し言葉と書き言葉が異なることを学んでいない場合、第1回目の授業や、その後に続く自己アピールにおいても、会話そのままのような文体で書いてしまうことがある。面接において、丁寧体で行なわれることも想定される自己アピールでは、その点

を特に指摘せず、いよいよ、「フォーマルな文章を書く」という段になって初めて、実は、このような言葉は話し言葉的であり、フォーマルな文章に使用するのは不適切であることを注意する。学生が実際用いた表現は下線部のような語である。

- このように、勉強する時のテレビは、私にとって気になってしょうがない存在なのである。
- ときたま、音楽を聞きながら机に向かって勉強することもある。また、私が以前通っていたバイト先もテレビやラジオを流しながら営業していた。
- 私の場合、一人で静かな所にいるのは好きではないし、ブルーな気分になりそうなので、テレビや音楽を聞きながら食事をとることはむしろいいことだ。
- 歌のリズムに乗っていると、自然に勉強内容が頭の中に入ってくるみたいである。
- テスト期間中などは、勉強に集中しようとするけど、見たい番組などがあると、つい気が散ってしまったりする。
- やっぱり、自分の好きな音楽を聞いたりテレビを見ながらの方がやる気も十分出て、勉強もはかどるだろうと思うからだ。
- それは私が経験したことがあるから、本当によくわかるのだ。
- 音楽を聞く時は音楽だけに集中するといったふうに、一つの事だけに集中してちゃんとけじめをつけるべきだと思う。
- 食事をする時、ちょうど私が見たい番組がやっているからである。
- 勉強をする時みたいに、かたっくるしくする必要がないから、食事や手伝いの時は見てもいいと思う。
- それは、ニュースとか役に立つこともあるけど、アニメやドラマとかは映像をそのまま見るだけで、想像力が全然身につかないからだ。

対象が日本人学生である場合、まず、自身が書いた文に、このように教師側が下線を施し、自分で訂正させるという方法もある。しかし、なかなかそれも難しく、学生によっては、「なぜこれが話し言葉なのかわからない」という者もいる。したがって、実際に学生が使用した話し言葉を、大まかに分類して示し、正解を提示するという指導を毎行なっている。以下に、ある授業における例を示す。

副詞

のんびり いろいろ (色々) たくさん すごく やっぱり スラっと
ロクに ちょっと あんまり めげずに ふらふらと とても
きちんと ちゃんと なにかしらの しわくちゃ ギリギリまで もっと

接続詞

でも あとは たぶん なので だから あと ですので そして

終助詞

～かな ～したいなあ ～よりかは (～の方がいい) ～んですけど

指示詞

こんな そんな いろんな みんな

接続助詞

～たら ～から ～とか～とか

語彙

お得感 マイブーム かっこいい ～にはまる 頑張る ト라우マです
やって(して) しんどい 大ざっぱ マシな 好きなモノ かじってました

省略

バイト バスケ部 学んでました 見てる 作ってます 部活 人社
中高と 閑空
食べれません 答えれる
知らないです 好きなんだ

接続詞「なので」は、どの期においても、何度も何度も指摘し、注意するのだが、なかなか改善が見られない。丁寧な表現として、書き言葉的であると誤って認識している学生が非常に多いようである。このように、日本人大学生でも、間違いを頻発するのであるから、留学生にとって、話し言葉と書き言葉の使い分けが困難であることは疑いようがない。中上級レベルの学生には、このような指導方法も有効なのではなかろうか。

3.2 起承転結

日本人大学生は、高校までにこの文章の配列について学習していると見えて、朝日新聞の天声人語の要約というリクエストと共に、このような流れで文章を書きたいという要望も多い。ただし、大学でのレポートは、序論・本論・結論という3章立てが基本であり、それが世界共通であることを示す必要がある。しかし、文章の読み方や書き方の練習としては、なじみのある起承転結に従うことも有効であると考え、以下のような課題を設定している。「起」「転」に当たる部分はこちらで提示し、「承」「結」の部分をヒントを与えた上で考えてもらうという方式である。留学生は、このような流れでの文章は書きなれていない可能性の方が高いが、日本的な文章の運び方の練習は、読解問題を解く際の手がかりにもなりえよう。

*起

いたるところで子供の虐待が起きている。近所の人が通報しても親が虐待を認めなかったり、児童相談所で預かっていても親が取り返しにきたり。なすすべはあるはずなのに、機能していない。

「社会が子供を守る」などというが、それは美しい話で、子供の生殺与奪の権は最終的に親が握っている、と私は考える。

***承**

虐待の具体例：親はどうあるべきか：命を預かるとはどういうことか、など

***転**

子供がいくらいふことを聞かなかろうと、無条件で子供を受け入れ、育てるのが、親である。子供にとって、親は立派なエリートである。虐待をする親というのは、自分がエリートであるとは気づいていない。親というのはそれほど重い立場にあるのだが、それを知らず、周囲も教えずにうっかり子供を持ち、挙句の果てに虐待する。そして、子供の生きる権利を奪う。

***結**

まとめ：最終的な意見：主張

3.3 要約および感想文

次に、自分の意見を述べるという目標をもって、感想文に取り組む。感想文は、日本人大学生であれば、高校までに読書感想文などの課題を何度かこなしたことがある、なじみのある課題であるが、ここでは、レポートへつなげる方策として、まず、文献や資料を要約し、それに対する自分の意見を感想として述べることを課している。要約の仕方としては、具体例に以下を提示し、2、3の短い文章を200字以内という制限で要約させる。

【課題文】

女の子の脳は人間や人の顔に、男の子の脳は物体やその形に反応しやすい。生後数時間から数ヶ月までの赤ん坊を調べると、例外なくひとつの事実が明らかになる。男の子はものに、女の子は人に興味を示すのだ。

男と女が配線の異なる脳で世界を見ていることは、科学的な数値にもはっきり現われている。女の赤ん坊が、人間の顔に注意を向け、相手と目を合わせる時間は男の子の二～三倍も長いし、男の赤ん坊は不規則な形・パターンをした動くおもちゃを見る時間が長かった。生後十二週ぐらいになると、女の子は家族とそれ以外の人間を写真で見分けられるようになる。でも男の子にはまだ無理だ。男の子はその代わり、なくなったおもちゃを見つけるのが得意だ。社会による条件づけがまだ行なわれていない、いわば白紙の状態でも、すでにこれだけの違いが現われている。片方に物体が、もう一方に人間の顔が見えるようにした双眼型の装置を学校へ行く前の子供にのぞかせて、どちらをよく覚えているかという実験を行なったところ、女の子は顔とその表情を、男の子は物体とその形を思い出すことが多かった。

積み木で建物を作らせたなら、女の子は低く左右に長い建物を作って、その中にどんな人間がいるか想像をふくらませる。男の子は、隣の男の子より大きく、高い構造物を作りたがる。走り回り、とびあがり、取っ組み合いをしたり、飛行機や戦車になったつもりで遊ぶのは男の子だ。女の子はどの男の子が好きだとか、どの男の子がバカみたいだといったことをおしゃべりする。

幼稚園でも、新しく入ってきた女の子はすぐに歓迎されて、女の子同士すぐに名前を覚えるが、新入りの男の子に対して、男の子たちは最初関心を示さず、その子が使えそうだとわかったところで序列関係に組み込む。一日いっしょにいたくせに、男の子たちは新入りの子の名前も知らなかったりするが、遊び相手として有能かどうかはちゃんと判断している。女の子は知らない子でも歓迎し、受け入れて、ハンディキャップや障害をもつ者にもやさしく接するが、男の子は仲間はずれにしたり、いじめたりする。

いくら男の子、女の子を分け隔てなく育てようと親が努力しても、脳の違いによって好みや行動ははっきり分かれてくる。四歳の女の子にティベアを与えたら、そのぬいぐるみは大切な友達になるだろう。男の子だと、ばらばらにしてつくりを確かめた後、すぐにどこかに放り出して次のおもちゃに興味を移す。

このように、男の子は物体とその仕組みに、女の子は人間とその関係に興味をもつ。そして、この違いは、男女の脳の違いに基づくものだ。どちらが良いとか悪いとかではなく、ただ違うのである。男も女も、自分と同じようにふるまうことを無意識のうちに相手に期待している。しかし、男と女は根本的に違っているのだから、そのような期待は二人の関係をおかしくさせてしまう。男と女は違うのだということにひとりひとりが気がつけば、男女間に起こる様々なトラブルの多くが解消されるはずだ。

『話を聞かない男、地図が読めない女』より一部改変

[要約例]

女と男は配線の異なる脳で世界を見ていて、それは科学的にもはっきり現れている。女の子は人間や人の顔に、男の子は物体や形によく反応する。女の子は人間関係に敏感で、男の子はおもちゃなどの仕組みに興味を示す。しかし、この違いは脳の違いに基づくものなので、どちらが良いというわけではない。このような違いを理解すれば、男女間に起こる様々なトラブルの多くが解消されるはずだ。

(180字)

要約の練習が終わったのち、要約文を用いて、それに関する感想文を以下の指示に基づいて書くことを課題としている。

***まずは要約**

女と男は配線の異なる脳で世界を見ていて、それは科学的にもはっきり現れているようだ。女の子は人間や人間関係に敏感で、男の子は物体や形、例えばおもちゃの仕組みなどに興味を示す。しかし、この違いは脳の違いに基づくものなので、どちらが良いというわけではない。このような違いを理解すれば、男女間に起こる様々なトラブルの多くが解消されるはずだ、と筆者は書いている。

***意見**

賛成

わたしは男性なので (具体例)

女性なので

反対

わたしは男性だが (具体例)

女性だが

***感想**

賛成

確かに、わたしの周りでも……………

したがって、筆者の言うように……………

反対

このように、必ずしもすべての男性・女性が筆者の指摘するようであるとは言い切れない。

したがって、……………

もちろん、指示通りに書かなくてもかまわないし、指示がある方が、型にはめられて書きにくいという学生が稀にいることも事実である。しかし、多くの学生が「いきなり書け、と言われても何をどう書いていいかわからない。だからこの授業を受講しているのだ」という思いでいるため、最小限のひな形ともいべきものを用意するようにしている。

3.4 意見文

感想文に続き、自分の意見を述べることに主眼を置く。これは、レポートや論文に直接つながる項目でもあり、大学では、必ず、事実と意見は分けること、および、根拠に基づいた意見を述べることの重要性を指摘せねばならない。そのため、扱いやすいトピックとして、賛成か

反対かに分かれやすいテーマをこちらで設定し、できればどちらかに自分の意見を決めた上で、事実→意見→理由（意見の根拠）という3段落の流れで書くように促している。前段階として、事実と意見の違いにも触れ、文末形式（「～らしい」「～に違いない」などは意見）の確認なども行なっている。一例を挙げる。

「クリスマスシーズンに多くの電球で樹木や街路樹を飾ること」を例に

*賛成か反対かをまず決めよう

1. まずは事実を示す

自分自身の経験

- ・そこここで見られるイルミネーション
- ・神戸ルミナリエ
- ・近所の子の飾りつけ

☆ 自分の意見（賛成か反対か）につながるような事実を

例：イルミネーションにより商店街が活性化される→賛成
電力不足が心配され、節電が叫ばれて久しい→反対

2. 意見

クリスマスシーズンに多くの電球で樹木や街路樹を飾ることに、わたしは

賛成だ。なぜなら（ ～ ）からだ。

反対だ。なぜなら（ ～ ）からだ。

3. 根拠（意見をサポートする理由）

例：最近暗いニュースが多い。年末だけでも明るい気分になれる→賛成
電球を張り巡らせることで、街路樹がいたむ→反対

☆ 1とは違うことを言って、複数の理由を示すことでより説得力を！

提出する前に、必ず見直しを課すが、回数を重ねても、話し言葉（特に「なので」の使用）が散見される。添削時に、話し言葉には青で線を引き、自己訂正を促している。

3.5 引用

次に、レポートや論文で必至となる引用についてである。まずは、資料の読み取り、および、その際に使用される用語の確認をし、実際に棒グラフを提示して、次のような課題を課す。引用の形式については、原稿用紙の書き方の説明で確認し、実際に練習していることが前提である。また、必ず、出典を示し、どこから引用したかわかるよう記述して、最後に参考文献とし

て出典を挙げることも繰り返し伝えている。学生には、例えば以下のような課題を課す。

* Aのグラフからは次のことがわかる。

* 一方、Bのグラフからは

ということがわかる。

また、

さらに、

このことから、

がわかる。

3.6 レポート

最後に、目標である、レポート作成にとりかかる。ただし、前述したように、自由にテーマを選択、資料収集、分析、考察という通常レポート作成に伴う過程をじゅうぶんにこなすだけの時間は残されていない。また、そもそも、「何をどうしていいかわからない」と受講している学生にすれば、テーマの設定すら困難を極める。そこで、本授業では、佐々木他（2006）の資料を用い、テーマも次のように指定した上で、大まかなレポートの作成を目指す。なお、資料は佐々木他（2006）のものをそのまま資料1-7として提示している。

「バイオマスを代替エネルギーに使用すべきか」をテーマに

* 序論

1. どうしてこのテーマを選んだか

- ・ 経験からの具体的な説明；温暖化の影響による不安定な気候で被害

- ・ニュースなどによる報道；地球温暖化、原発問題etc

2. 「バイオマス」とは？ = ことばの定義 資料1

3. レポートの流れ

まず、~~~~。次に、~~~~。そして／それから~~~~。
最後に、(バイオマスを代替エネルギーに使用するべきかどうかの) 結論
を述べる。

例) まず、バイオマスが日本でどのくらい利用されているのか、現状を報告する。次に、
バイオマスの種類を具体的に述べる。それから、バイオマスの利用状況を種類別に見て
いく。そして、バイオマスを使用するメリットについて説明し、最後に本レポートの結
論を述べる。

*本論

- ☆ 序論で書いたことを順番に！
- ☆ 資料を使って、客観的に説明！ 資料2～8 (選んだものだけ)
- ☆ 自分の意見に読者が納得できるよう、具体的に！
- ☆ 引用の仕方に注意！

*結論

- ☆ テーマに対する答え
バイオマスを代替エネルギーに使用するべきだ+ 理由 (本論のまとめ)
または
バイオマスを代替エネルギーに使用するべきではない +理由 (")

*資料

- ☆ 自分で番号をつける = 資料1、2、3・・・
- ☆ 資料をどこから取ったか (本の名前やネットのURL) をタイトルの後に
() して示す

*参考文献

- ☆ 書き方は指示通りに！

資料は、前述のように、1-7までを提示しているが、すべて使用するのでなく、自身の主張に
合致したものだけを選択し、オリジナルの番号をつけるよう指導している。だいたい3コマを
あて、構成と序論に1コマ (用語の復習なども含む；話し言葉に注意、わたし→筆者、このレ
ポート→本レポート、ここ→本章、など)、本論に1コマ、結論および総括に1コマを用いて、

完成とする。個人差があり、時間のかかる学生には、教員からの積極的なサポートが必要であるが、テーマをこちらで選定し、資料も提示してあるので、全く書けないという学生はこれまでのところひとりもない。ただ、組み立てや用語などに苦戦する様子がしばしば見て取れる。

4 学生の評価

毎回試行錯誤を繰り返す授業ではあるが、人数制限が設けられていることにより、学生ひとりひとりへのフィードバックが可能であるため、学生アンケートによる大学が設定する各項目への評価は、毎回、常に平均を上回っている。また、あまり記述されない傾向にある自由記述欄にも、特に指示をしなくても、以下のようなコメントがある。例として、2012年後期、2014年後期および2015年前期（薬学部）の自由記述を示す。

2012年

- ・楽しく、わかりやすい授業でとてもためになりました。静かに集中して取り組めてよかったです。
- ・私達がやりたいことを取り入れてくれたのでよかったです。
- ・受講生の多様な要求にバランスよく対応していて、よかったです。
- ・今まで知らなかった事はもちろん、間違えて覚えていた事に気づくことができました。敬語の使い方や文章の書き方、履歴書の書き方。今後、必要となっていく事ばかり学べて、抽選にあたってよかったですとおもいます。
- ・授業全体を通して、大学での生活でも普段の生活でも双方にまたがり、糧となった。特に、敬語、論文の書き方がよかったです。
- ・敬語は、少しだが中学や高校の時にも教わったが、完璧に覚えることはできていなかった。この授業で、演習問題を解く時間が多かったので普段から先輩などの目上の方への言葉遣いが学べたのでとてもよかったです。

2014年

- ・文章の書き方など、社会に出て必要であることをたくさんとり上げて下さり、とても役に立った。また豆知識も増えて授業に出てかなり良かったと感じた。
- ・課題をやる前の説明が的確で良かったです。
- ・履歴書や、敬語など、これから社会に出る為に使えるので、受講して良かったです。また、卒論とかもあるので、論述に慣れておくと、役に立つと思いました。
- ・敬語を複数回したことにより、使い方や、場面・人物に対して等のわけ方がわかるようになった。
- ・たくさんのレポートや敬語など新しくしらなかったことや知りたかったことを学ぶことができたので良かったです。

2015年

- ・敬語の使い方やレポートの書き方はとてもよかったです。
- ・毎回の授業がとてもためになることばかりで楽しんで取り組むことができました。ありがとうございました。
- ・日本語は非常に興味があり、将来的に本当に役に立つと思うので、常に楽しく授業を受け

れた。

- ・レポートや意見文など今後の大学生活にとっても役立つ授業でした。

筆者が意外であったのは、敬語に対する評価が高かったことだ。これは、日本人大学生といえども、いかに敬語に習熟していないかと言う点と、将来を見据え、敬語の習得に意義を見出している点を如実に表していると言えよう。逆に言えば、日本人大学生でもこれほど不得手とする敬語の運用を留学生に求めるのは現実的ではないこと、しかし、やはり日本社会で就職までを考慮に入れるのであれば、敬語の知識は不可欠であり、ある程度の習得が望まれる、とうことを表しているだろう。

5 留学生への応用と今後の課題

これまで、日本人学生に対する「文章表現」「日本語表現」の授業の実践を述べてきた。日本人学生と外国人留学生では、大学生という身分や立場は同じくするものの、よってたつところが異なることも多い。しかし、大学生としてレポート執筆、ひいては卒業論文作成など求められる共通点も多々ある。最近では、日本で大学院に進学したり、日本で就職を希望したりする留学生も増えている。大学院に進学すれば、ますます論文執筆が求められるし、日本で就職を希望する場合は、エントリーシート作成から、敬語の的確な使用まで、日本人学生に期待される多くのことが、留学生にも求められるようになるであろう。筆者が第1回目の授業で行なっているように、ニーズ分析のためのアンケートを行なうことはもちろん、日本の大学卒業後の進路について、日本人学生ほど情報を持たない彼らには、日本人学生がどのようなニーズを持っているかを紹介することも効果的なのではないだろうか。

文章のつなげ方である接続表現や敬語は、留学生にとっては文法の範疇に属する項目である。当然、受講のレベルとしては、初級を終了した中上級の学習者、ということになるであろう。しかし、既習であることと運用できるかどうかということは当然異なるため、運用面に重点を置いた授業が必要であろう。留学生は、日本人学生とは同じ教育的バックグラウンドを持たないため、「起承転結」に基づく文章などは時間がなければ、無理に取り扱う必要はないと考えられる。それよりも、自己アピールにおいて、最近では、ユニークである点を強調するのが好ましいとされる一方、日本的な独特の文化（「出る釘は打たれる」など、あまり目立ちすぎない、自慢と取られないよう気を付ける）の紹介も、背景知識として、折に触れ、扱う必要があるであろう。

クラスのサイズは、当然ながら、制限を設けるべきである。評価については、担当者に任されることが通常であり、筆者は、特に試験などはせず、毎回の出席および提出物によって行なっている。毎回課題のある授業であり、ひとりひとりのレベルや得手不得手が異なるための措置であるが、受講者によって考慮の必要があるだろう。

本学においては、日本語・日本文化研修留学生プログラムやメイプル・プログラム（大阪大学短期留学日本語日本文化特別プログラム）の中級以降の選択作文授業および学部留学生プログラム上級クラスにおける「文章表現」の授業に応用可能であると考えられる。

日本人大学生向けとして発行され、「文章表現」「日本語表現」という名で開講されている授業で多く使用されているテキストは、もともと、日本語学習者向けに開発されたテキストを参

考にしている場合が多い。いわば、日本語教育から多くの知見を得ているわけだ。ならば、逆に、日本人学生に向けた「文章表現」「日本語表現」から得た知見を、再度、日本語教育に還元すれば、相互の知見が生かされ、より効果的な授業が行なえるのではないだろうか。

【参考文献】

- 阿部紘久（2009）『簡単だけど、だれも教えてくれない77のテクニック 文章力の基本』 日本実業出版社
- 岡田眸（1996）「教授法の授業が受講生の持つ言語学習についての確信に及ぼす効果」『日本語教育』89号
- 岡村裕美・辻野あらと（2012）「「文章表現」授業の取り組みの経過と課題」『教育開発センタージャーナル』第3号 神戸学院大学教育開発センター
- 大島弥生（2010）「大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試み—ライティングのプロセスにおける協働学習の活用へ向けて—」『京都大学高等教育研究第』16号
- 木戸光子（2000）「大学生における文章表現教育の試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15
- 佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子（2006）『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング 短文からレポート作成まで』The Japan Times
- 秦松梅（2015）「日本語会話授業の問題点に対する捉え方—中国の大学における日本語専攻の学習者の場合—」『日本語教育』161号
- 高松正毅（2003）「「文章表現技術」の理論確立に向けて」『高崎経済大学論集』第45巻第4号
- 田中宏幸（2004）「大学教養教育における文章表現指導の実際—2003年度1期「文学IV」の場合—」『中西一弘先生古稀記念論文集』大阪国語教育研究会
- 西垣順子（2010）「大学生のアカデミックライティング教育におけるアカデミックリテラシーアプローチの可能性と課題」『大阪市立大学大学教育』第8巻第1号 大阪市立大学教育研究センター
- 野田尚史・森口稔（2003）『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房
- 花田修一（2012）「専門職大学院における文章表現演習（その1）」『教育総合研究』第5号
- 橋本修・安部朋世・福嶋健伸編著（2008）『大学生のための日本語表現トレーニング スキルアップ編』三省堂
- 浜田麻里他（1997）『論文ワークブック』くろしお出版
- Nunan, D. (1995) *Closing the gap between learning and instruction*. TESOL QUARTERLY vol.29

（ふるかわ ゆりこ 本センター非常勤講師）